

平成29年度  
学校関係者評価書

《実施日：平成30年2月15日》

〈専〉京都伝統工芸大学校

## 1. 目的

学校関係者評価は、京都伝統工芸大学校が公的な教育機関として社会に対する説明責任を果たしつつ、学校運営の絶え間ない改善を図り、もって学生が実践的な職業教育を受け、即戦力として社会に通用する人材の育成につなげるために行うものである。

## 2. 学校関係者評価について

学校運営について学校関係者が自ら行った自己評価を、外部の客観的な立場から再評価し、改善に向け専門的な助言を行うものである。学校関係者評価委員会の委員は、学生が就職する企業、卒業生、保護者、教育関係者から選定し、公平で中立的な評価を行うよう配慮している。今回は2月に開催された学校関係者評価委員会を踏まえ、自己評価ならびに自己評価にもとづく改善取組の適切性について評価した。

## 3. 学校関係者評価委員会

### (1) 委員

木上 晴之	京都府南丹教育局長
江崎 信芳	放送大学京都学習センター所長
三田 康明	公益財団法人京都国際センター常務理事
佐藤 幸男	京都府石材業協同組合顧問
遠藤 公誉	京都伝統工芸大学校卒業生
玉村 嘉章	京都伝統工芸大学校卒業生
田中 宏明	卒業生田中めぐみさんの保護者

### (2) 任期

委員任期を平成29年4月1日から30年3月31日とする。

## 4. 実施

平成30年2月15日（水）京都伝統工芸館において、学校関係者評価委員会が開催された。

平成29年度 京都伝統工芸大学校  
学校関係者評価委員会 開催議事録

開催日時 平成30年2月15日（水）午後3時30分より午後4時30分

開催場所 京都伝統工芸館 8階会議室

委員 木上晴之様  
江崎信芳様（欠席）  
三田康明様  
佐藤幸男様  
遠藤公誉様  
玉村嘉章様  
田中宏明様

（議事進行・学校関係者）新谷由貴代校長 工藤良健教務部長  
近藤、北村

- 1 開会の挨拶 京都伝統工芸大学校事務部長 近藤充宏
- 2 委員紹介
- 3 議事
  - （1）平成29年度教育計画とカリキュラム改革について
  - （2）就職活動・就職実績に関して
  - （3）平成30年度入学者の募集状況等
  - （4）学生アンケートの結果について
  - （5）その他・質疑応答・全体への意見

#### 4 議事詳細

##### (1) 平成29年度教育計画とカリキュラム改革について

教務部長が、2年制から3・4年制へと教育の重点を移しかえる経緯について説明した。3・4年制希望者は順調に推移し、3・4年制への変更は受験生にも概ね受け入れられていると評価した。3・4年時の授業内容の充実に取り組み始めたことを報告した。カリキュラムの魅力を高める取り組みを継続することの必要性に言及した。

##### (2) 就職活動・就職実績に関して

教務部長が卒業対象者143名のうち、77名が内定(2018年2月時点)、進学・独立の学生を除いた就職希望者の9割が進路決定していると報告した。

専攻科への進学希望者が陶芸専攻で増加していることに言及した。専門性・難易度が高く、応用課程にふさわしい釉薬を学習できるので進学を歓迎すると発言した。就職について45歳女性が希望の分野への就職を実現したことを付言した。

##### (3) 平成30年度入学者の募集状況等

教務部長が10月後半から入学希望者が鈍化したと報告した。TVメディアの影響力が低下したこと、修学期間の増加が社会人学生に受け入れられなかったとの認識を示した。新谷校長が震災の流出松を用いた仏像制作、2月23日テレビ東京「池の水ぜんぶ抜く！」という番組でとりあげられることについて紹介し、取材等へ協力する意欲を示した。

##### (4) 学生アンケートの結果について

教務部長が在校生アンケートについて、専門実習について評価が高い一方、座学では低調の傾向が続いていることについて報告した。ハラスメントについて言及し、大きな問題はないとの認識を示した。

##### (5) その他・質疑応答・全体への意見

委員から、入学者の基礎学力、素養の相違に対する対応について質問があった。教務部長が下位のレベルの学生を中位に引き上げることが課題であるが限界があると回答した。他の委員から、学校に限らない問題であるとの認識が示された。

委員から姉妹校への編入、関係性について質問があった。教務部長が京都伝統工芸大学は職人を養成する学校であると回答した。京都美術工芸大学は大学院の新設も考え、美学としての工芸を学ぶ人材育成を目指していると回答した。

校長が日本の家具、インテリアの評価が海外では思いのほか高く、作り手はいわゆる売れ筋を念頭に置いて制作することにより新たな展開の可能性があると発言した。委員から、留学生の就職に深く関わっている委員から学生の動機づけ、カウンセリングなど心理的側面の支援の必要性を指摘する発言があった。

委員から学生の経済状況について心配する発言があり、教務部長が2年制がその受け皿と

なり得ると回答した。

委員の間で小中高の教育現場を踏まえた、いわゆる「誉めて育てる」方針にもとづく指導について意見交換がされた。

委員から講師をどう確保していくかについて、卒業生の登用を活発にすすめていくべきとの提案があった。

## 5. 学校関係者評価委員会の評価

### (1) 自己評価への評価

平成29年度の重点目標は1) 修業年限の変更にもなうカリキュラムの充実、2) キャリア教育の充実、3) 就職率の維持・向上、退学率の低減の3点が掲げられ、自己評価は以上の点に関連する項目に重点が置かれていた。評定は5段階評価の4が大半をしめ自己評価は高かった。

今回の会議のなかでデザイン系の科目を新設することを検討していると報告があった。伝統的工芸品の制作技術を反復訓練し身につけさせる授業こそ、本校の本分であり、その基本線は維持すべきである。その上でどのような授業を展開することができるのか検討を重ねる必要がある。

海外校との間で交流について言及があった。現在は諸外国との交流が活発になり、国内だけで完結する仕事はなくなった。伝統的工芸品についても同様である。情報・移動手段の向上は日本の伝統的工芸品を海外に発信する好機である。海外校との交流をはかり、学生が海外に目を向けるような環境づくりが待たれる。

多様な工法が存在する工芸の分野で、指導方法や教育課程に統一性をもたせること、伝統的工芸品の制作技術を教えながら、現代の生活様式に合致したモノづくりまで教育することの難しさを実感する。こうした難しさに直面しながらも、指導方法の一貫性、学外実習の実施、伝統産業界の要請を授業に反映できるよう学校改善に取り組んでいる姿勢がみられたことを評価する。

### (2) 改善取組についての評価

入学前に精神の病に罹患し、入学後重篤化するケースが多いことが報告された。退学率の低減が改善しない原因の一つと考えられる。この点は、一学校の努力だけで解決するものでないことは理解するが、企業の社会的な責任の観点から大学校においても継続した取り組みを求める。スクールカウンセラーや保健師を配置するなど、心身に不調を来す学生への対応に配慮していることを評価する。学生の利用状況などをみてこれらの方策がケアを必要とする学生に広く利用されているかなど自己点検を徹底する必要がある。成果をあげることは難しい取り組みであるが、病気療養を理由とする退学者を低減する取り組みを地道に継続することを期待する。

伝統工芸の技術の承継と発展に取り組む学生自身にかかる負荷の大きさは並大抵のものでは

ないと想像する。したがって学生生活に対する支援を充実させることは重要な課題である。加えて、毎年一定割合の学生は深刻な精神面の問題を抱えて入学してくる。学生への心身のケアはいや増していく。十分な対応を求める。

文部科学省ガイドラインに準拠した項目に基づき自己点検・自己評価することが定着した。教育活動・学修成果・学生支援・財務・社会貢献・地域貢献など点検項目が多岐にわたるなかで、課題を発見し改善にまでつなげるのに有用である。各項目についての評価を一つずつ上げるよう取り組めば、改善の方針を大きく間違えることはない。委員会としては優先順位をつけて計画的に取り組むことを求めるにとどめ、改善取組はこれまでどおり是と評価する。